

Fenestra

京大西洋史学報



第8号 (2024年4月)

京都大学大学院文学研究科

西洋史研究室

フェネストラ

京大西洋史学報

第8号目次

論説・動向

庄子大亮

ヘヴィメタルと古典古代の共鳴.....1

ユディト・ポルマン (藤田風花訳・安平弦司監訳)

内戦を忘れ去る ——近世ヨーロッパにおける調停戦略としての忘却——12

解題——ユディト・ポルマンと近世記憶実践の文化史—— (安平弦司)27

小俣ラポー日登美

過去を研究するためにとる距離——自著『殉教の日本 近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』から出発する「遠読」というデジタル・ヒューマニティーズ実践——

.....30

新刊紹介

城本昌明・南田和香

姫岡とし子『ジェンダー史 10 講』44

留学体験記

林祐一郎

自分に《資格》はあるのか47

新垣春佳

維納回草子52

田中のえ

ポストコロナの大学生活55

研究集会の記録

酒嶋恭平

国際ワークショップ開催記60

西洋史研究室の現在

時代別演習と専任教員の講義65

大学院生の研究70

編集後記75

《表紙の写真》：カフェ・ツェントラルの窓際の席で（ウィーン・オーストリア）

今では観光客が席のほとんどを占めるカフェだが、約1世紀前はフロイトやヘルツルに代表される、ウィーンに馴染み深い文化人や政治家が互いに意見を交わし、束の間の休息を味わう場であった。また前世紀転換期のウィーンは、トロツキーやティトーなど、ヨーロッパの様々な地域から政治的野心をもった若者を惹きつける世界都市であった。彼らはツェントラルに足繁く通い、カフェに用意されている世界各国の新聞から国際社会についての知識を得、幅広い世代の人々と議論を通じて自身の思想を彫琢していった。現在も店内の一角にずらりと立てかけられている多言語の新聞は、当時の活発な、地域や世代を超越した言論空間を偲ばせる。

編集後記

同時代史の激動に呆然とします。去年4月、「書くべき「危機」が積み重なってくる」とここに記しました。その後も、イスラエル軍によるガザ侵攻、能登半島地震と続き、すでに起きた（しばしば現在進行中の）衝撃的出来事の数々が、実際には人類史に留まって影響を与え続けているにもかかわらず、それらは皆、認識上、上書きされ姿を消していくかのようです。今を生きる私たちの歴史観や過去への興味関心の所在は、刻々と変容しているのでしょう。それらが反映しているのが、本号所収の文章です。また、奇しくも本号には、近世ヨーロッパにおける争いを調停する方途としての「忘却」を論じたユディト・ボルマン氏の講演の翻訳を掲載できました。

前号に引き続き、本号の編集は新田さな子さん、坂野水咲さん、藤本俊哉さんにいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

(金澤)

2024年4月30日発行 非売品

『フェネストラ——京大西洋史学報——』（第8号）

発行者 京都大学大学院文学研究科西洋史研究室

京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室

電話 075-753-2791